

最強の矛と鉄壁の楯

渡科 由太

俺はこの学校一のテクニシャン。これまでにナかせた女は数知れず。どんな女も、この俺のゴールドフィンガーの前にはイチコロさ。

そして俺は今日も、まだあどけなさを残した一人の少女を、毒牙にかけようとしている。

これから何が起ころのかも知らない生娘の背後から、俺は彼女の着衣の裾に手をかける。そして、一気に上へと引き上げた——！

——かと思われたが、彼女は身を翻して俺の手からスカートの支配を取り戻す。そして振り返り様に、回転をのせた強烈な平手を振るう。

俺は、咄嗟に身を引いて彼女の平手から逃れた。すると彼女は勢いを殺すことなく一回転し、遠心力を込めた渾身の中段蹴りによる追撃をくり出してくる。

「グフ——ッ！」

彼女の足を鳩尾に受けた俺は、腹を押さえながらその場にくまらずくまる。しかし苦痛に苛まれながらも、俺は伸ばされた彼女の足を凝視していた。

だがどれだけ祈りを込めて見つめようと、スカートの奥に広がるパライソが俺の眼前に現れることはなかった。

「くそっ！ 今回も、なんの成果も得られなかったああ——！！」

慟哭と共にこぼれてしまう涙を拭うこともなく、俺は廊下の床を殴打した。叩きつけた悔しさは余さず俺の拳に痛みとして返ってくるが、こんなもの俺の胸中の切なさに比べればなんてことはない。

「……バカじゃん？」

「お前はあ！ エロスに向けられる男の渴望と情熱というものが分かっていないい！」

俺の眼前1メートルのところで、仁王立ちしている彼女。俺はそんな彼女へと、物音を立てることなく近づく。

「いや、そりゃあ知らんよ……。私、男じゃないし」

「エロスへの渴望に性別など関係ない！ お前にもあるだろう、その胸に熱いパトスが！ さあさらけ出してみる、カッコ物理的な意味で！」

さらに、彼女との間合いを詰める。気付かれてはならない。とにかく、阿呆な発言で彼女の気を逸らすのだ。

「はい、ストツプ。それ以上は近づかせない」

「な——ッ!？」

何故だ、どうして気付かれた!?

偽装は完璧なはず。俺はアハ体験映像よりも遅々とした動きで、決して俺との距離の概算を気取られないようにしていたというのに!

「そういうのを全部呟いてるのが悪いんじゃない?」

「馬鹿な……。この俺様が、そんな安直なミスを犯すとは……」

千載一遇の好機を生かせなかった、深い失意に俺は飲まれるのだった。



幼い頃からスカートめくりを己がライフワークとしている俺は、今年も既にクラスメイトのほぼ全てをコンプリートしていた。学年内でも、めぼしい女子はほぼ攻略済みである。

だがしかし、昔から見知っている彼女だけは、何度挑もうともその秘められし樂園を拝むことはできなかった。

ある時は、用具室に仕舞われている巨大扇風機を持ち出して、授業中の彼女の教室へと突撃を敢行した。

あの日の俺の同時撃墜数レコードは今も抜かれることはない。

だが、彼女のスカートだけはまるで重りでも仕込んでいるかの如く微動だにできなかった。もちろん先生には怒られた。女子にはボコられた。

またある時は校門付近の土を掘削し、保護色で身を潜めながら彼女の到来を待ちわびた。

大勢の男女に足蹴にされ、危うく何か目覚めそうになった。だが彼女だけはどうしてか俺の存在を察知し、俺を嚴重に生き埋めにしてから登校していったのだ。

結局自分で脱出することはできず、俺はなんとか先生に救出されることで一命を取り留めた。もちろん怒られた。俺の目的を察したらしき女子にはボコられた。

そして気でも狂ったのか手段を見失った俺は、体育のために着替えている女子の更衣室へとカミカゼを吹かせた。

そこで俺は、一つの桃源郷を見た。しかし彼女だけは、既に着替えを済ませていた。もちろん先生には怒られた。女子にはボコられた。



今のままの俺では、どれほど策を弄そうとも彼女に勝てない。そんな結論に達した俺は、まずは彼女が立っている域へと己を高める決意をしたのだった。

「……で、お前は相も変わらず阿呆なことをしてるわけか」

「男には、やらなきゃならない時つてのがあるもんです。それは親父さんも分かっているでしょう？」

「お願いします！ 俺にもう一度あいつと同じ——否、あいつ以上の稽古を付けてください！」

彼女の生家である道場を訪れた俺は、彼女の親父さんへと頭を下げているのだった。あなたの娘さんのスカートをめくりたい。力を貸してくれ、と。

かつて彼女と共に心身を鍛えていた場だが、あまりの辛さに俺は逃げ出してしまったのだ。そしてそれこそが、俺が彼女に勝てない決定的な要因なのだと確信していた。

「……お前、いい目をするようになったじゃねえか。」

「——いいぜ、お前がどうしてもやるってんなら、まずはそのふざけた性根を叩き直す！」

こうして俺は、遙か高みへと至った彼女になんとか追い付くべく、地獄の特訓に身を投じるのだった。



「……で、あんたは私のパンツを見たいがために、パパからそんなボロボロにされたってわけ」

——放課後の、夕焼け色に染まった校舎裏で、俺と対峙している彼女。

「笑わば笑ええい！ 所詮女には分かるまい！ 男にはなあ、どれだけ無意味で無様でも、勝たなきゃならない戦いってものがあるんだ！」

鬱陶しげな彼女に向かって、俺は構えを取る。死すらぬるいと思えるほどの特訓を経て、俺は遂に彼女へと挑む。

そんな俺の前に彼女は深いため息をつく、応じるように構えた。

「——先手必勝！」

彼女へと一息に踏み込んだ俺は、彼女の顔面へと右の拳を見舞う。だが彼女は片腕のみで、巧みに俺の殴打をいなした。

だがこれはあくまでもフェイク。俺は右の正拳と同時に、左で彼女のスカートを取りにかかっていたのだ。

「遅いわね。蠅でも止まりにくるんじゃないの」
すると彼女は俺の足を払いつつ、胸元に手を突いて俺を後方へと突き飛ばした。

「——ツク！」

全身が、ぐるりと一回転する。頭から地面へと叩きつけられそうになりながらも、俺は身を捻って足を彼女のスカートへと伸ばす。

だが彼女は俺の足をかわずのどなく、逆に一步踏み出してきた。そして空中で思うように身動きが取れない俺の頭を掴むと、そのまま顔を地面に叩きつけた。

「ムグ——ウ！」

彼女は俺の顔を地面に押しつけたまま、俺の頭を踏みつける。くそっ、今上を向ければ拝み放題なのだが。

頭を捻って逃れようとするが、彼女は巧みに重心を移動しながら、決して俺を解放してはくれない。

グリグリと地面へと擦り付けられ、砂と血の味が唞内に広がる。そして次の瞬間、彼女は俺の腹を思い切り蹴り付けた。

「ガハ——アッ！」

蹴り飛ばされながら、朦朧とする意識で彼女の方へと目を向けた。しかし、やはりスカートの先が露わになることはない。

「薄汚れて地面にはいつくばって、無様なものね。」

そんなに地面をはいつくばってるのが好きなら、虫にでもなれば？」

冷笑と共に放たれる彼女の言葉を黙殺しながら、俺はヨロヨ

ロと立ち上がる。鼻や口から流れ落ちる血を粗雑に拭いながら、霞む視界で彼女を見据える。

やはり、真正面から彼女に向かったところで勝負にはならないか。それはそうだ、俺と彼女の間には長いブランクがあるのだ。

俺がいくら真面目に取り組んだところで、短期間の修行で比肩することなどできはしない。

「……ごめんなさい、親父さん。あれ、使わせてもらいます！」

俺はズボンのポケットから、赤い小瓶を取り出す。そして蓋を開け、中の液体を一息に飲み干した。

「ちよ、それって。パパの——！」

それまで冷静さを崩すことのなかった彼女が、突如焦りを見せた。だが、今の俺にそんなことを気にしている余裕はない。

「うう、ぐおおおおお——！」

体が、熱い。燃えるようだ。俺の心臓は全身の血管を突き破らんばかりに、猛烈な勢いで血液を送り始めた。

それと同時に俺の中の生への渴望が、かつてないほど巨大に膨れ上がった。

だが、これでは勝てない。こんな、熱病に冒されたような状態で、彼女に一撃を叩き込めるはずがないのだ。

そう、彼女に勝つためにはこれではだめだ。親父さんとの地獄の特訓を思い起こす。そしてその中で交わされた言葉を。

「手は熱く、頭は冷たく——だ！」

俺の中で膨れ上がる渴望を、軀の一点に収束させるイメージを思い浮かべた。すると、急激な血流がその一点を正しく肥大化させ始めた。

流れる血潮で、黄昏よりも真っ赤に染まった、俺の右腕。まるで蜃気楼のように、周囲の空気が揺らめいている。

「——征くぞ。燃やすぜ、俺のリビドー！」

技も何もなく、残った体力を振り絞って彼女へと踏み込む。

「——つく！ まさかパパのあれを持ち出してくるなんて！」

構えを取って、俺の掌打に備える彼女。その防御の真正面から、俺は燃える右腕を叩き込んだ。

「——!? あつうー！」

「うおおおおおお！」

彼女の防御が崩れた。好機は今を置いて他にない——！

彼女の前身ががら空きになったところで、俺は彼女のスカートを掴む。そして引き裂くかのように、上へと掲げた。

彼女のスカートは、俺の熱気で燃え尽きるかのように霧散した。そしてこれまでずっと隠されてきた、秘境の全貌が明らかになる。

俺はカツモクして、その様を脳内に焼き付けようとした。

そしてそこには——健康的なスパッツがあった。

「そ、そんな落ち、かよ……」

そして全ての体力を使い果たした俺は、スパッツ姿の彼女の前に倒れ伏す。

「……阿呆」

そんな彼女の呟きと共に、俺の意識は昏い闇に落ちていった。



その後の話。

俺は、彼女の親父さんが隠していたドリンクを勝手に飲んでしまったことで、こっぴどく怒られた。彼女のお袋さんはなんだか複雑な顔をしていた。

そして破られたスカートの札だと言う彼女によって、俺はさらに徹底的にボコられた。

それから一ヶ月。そこには元気に学校へと通う俺の姿が。

「もうスカートめくりなんて絶対にしないよ！」

多分しない。しないとと思う。まあちよつとは見逃してほしい。

月刊伍じうす学祭号 通卷192号

2013年 10月22日発行

編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成

印刷所 広島大学文団BOX